

ちびっこラジス



ちびっこラジス

現代世界名作童話 10

N.D.C. 949 講談社 132pp. 23cm

昭和44年3月25日 第1刷発行

作 者 J=M=サンチェスシルバ

訳 者 江崎桂子

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京(942) 1111 <大代表>

振替口座 東京 3930

印 刷 凸版印刷株式会社

製 本 株式会社 堅省堂

定価 590円

© 1969

UN GRAN PEQUEÑO

by José María Sánchez-Silva © 1967

Illustrated by José Luis Macias. S.

Japanese translation rights arranged through

Josefina Keiko Ezaki

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。Printed in Japan





現代世界名作童話 10

ちびっこラジス

J=M=サンチェスシルバ 作

江崎桂子 訳

J=L=マシアス 絵



もくじ

9	よごれた町のかしこい弱虫 ^{まち} 9
2	ま夜中 ^{よなか} のひそひそ話 ^{ばなし} 18
3	山番 ^{やまばん} のおじさんのうちへ..... 23
4	あつ、おじちゃん、虫 ^{むし} んこが！..... 32
5	ローラおばさんびっくり..... 38
6	ありとお話 ^{はなし} ！..... 45
7	ふしぎなちゅうしゃ..... 50
8	ありのせなかにのってしゅっぱつ..... 56
9	すばらしいありの家 ^{いえ} 63



18	あとがき.....	129
17	生まれかわったラジス.....	112
16	わたしたちをたすけてください.....	108
15	秋の大雨.....	99
14	長い長いぎょうれつ.....	91
13	ありのラグビー.....	85
12	しろありたちがあぶない.....	78
11	ラジスはおよぎを、おじさんは字を.....	73
10	教え合い.....	68



ちびっこラジス

どうぶつたちは

しゃべらないっていうけど、

なかにはしゃべるのもいるってこと、

きみもぼくも

知^しってるんだよね。

よごれた町のかしこい弱虫

その町は、大きくってきたない町でした。ずっとまえ、まだちっちな町だったころにくらべると、ごみごみしていました。石やコンクリートや、てつやけむりでいっぱいです。高いたてもものの間の日のささないせまい道を、何人かの人たちが、いつもいそぎ足で歩いていました。

まがりかどには、木が一本、ぽつんと立っていて、そのまわりは、子どもたちがそばに近よれないように、てつのさくでかこまれていました。まるで、はくぶつかんのちんれつひんのようにです。どうろには、年がら年じゅう、バスやトラックやオートバイが、やかましい音をたてながら走っていました。パンまで、ガソリンのにおいがするほどです。

いぬっ子^こ一^ひびき見^みあたら^みず、うまもとおりま
せん。木^きはないし、けむりがいっばいな
で、小鳥^{こどり}たちも、今^{いま}では、この町^{まち}からいなく
なっていました。ねこだけが、ときたま、か
べにぴたりくっついて、おばけのように、



すうっとすばやくにげていくのでした。ラジスの家では、かごに入れて鳥を一わかっていました。ちょっとびっこのすずめで、やかましい音や、えんとつから出るけむりでふらふらしたのか、やねからおちてきたのです。それと、おかあさんが、ときどき思い出しては手入れをする、ひからびたうえ木ばちがありました。

あの、木のあるまがりかどをそのままいくとこうえんがありました。でも、子どもたちがはいれないこうえんで、歩いたり走ったりできるのは、しばふのない、かたいじめんや、石ころだらけの道だけでした。

それから、もっと遠くにいくとどうぶつえんがありました。そこでは、けものたちはみんなかなしそうで、おなががすいて、ねむくてたまらないようすでした。見るたびにかわいそうになってしまふほどでした。

もっとどんどん遠くにいくと、しぜん科学はくぶつかんがありました。そこでは、どうぶつもしよくぶつも、みんなしんでいるようでした。くさっているのもありました。

ラジスは年よりも小さくて、それに、まだ八つにもならないのに、「九つだよ。」といいたくてうずうずしていました。きんじょの男の子たちがぶったりしないように、早く大きくなりたいと思っていたからでしょうか。

おとうさんとおかあさんは、アパートのかんり人にんをしていて、くらくてじめじめしたへやにすんでいました。光ひかりがきすのはたったひとつ、中なかにわに出るドアからだけです。

へやの中なかには、おかあさんのヘトラがりょうりをするガスこんろと、テーブルと、大きなベッド、それに、もの入れの上うえにふとんをのせて作った、ラジスのそまつなベッドがありました。

中なかにわは、いつも、家いえをあたためるためにたくせきたんのけむりでまっ黒くろ。そのうえ、だいどころのまどからおちてくるもので、年ねんじゅうよごれていました。そこには、夜よどおし、ホトホトと水みずの音おとがするふんすいがありました。しめったせきたんのおいでむかむかするので、ラジスは、早はやく夏なつになればいいのにと、心こころから思おもっていました。

ラジスは、小しょう学がく校こうにかよっていました。学がく校こうにもコンクリートの中なかにわがあって、まん中なかには、小ちいきなかれた木きが立たっていました。木きというよりはまるでほうきでした。

ラジスは、しょっちゅうびようきをして学がく校こうを休やすんでいました。ひどいかぜをひいて、はなのあたまがまっかになったり、目めがひりひりしないときは、おなががいたくてねつがあるというぐあいだったのです。

ちびで、やせっぽちで、青あお白しろくて、つったっているような大おおきな耳みみには、ほそいぺたん



この赤毛^{あかげ}がとてもじゃまでした。首^{くび}はほそくて、手^ては冬^{ふゆ}になるとしもやけだらけでした。おとうさんとおかあさんは、ラジスのからだのことをたいへんしんばいしていました。なぜかという、まえに、男^{おとこ}の子をひとりなくしていたからです。

おとうさんはフェリシアノといい、アバートのかんりのほかにも、はたらきに出^でなければなりません。あるときはさかんや、あるときはペンキや、あるときは水道^{すいどう}のこうじやです。そして、夜^{よる}はつかいはしりをしたり、ときには、手^ておし車^{くるま}をかりてはこびやもやりました。こっちのものをあっちにとどけるしごとで、えきにも、よくものをはこんでいきました。

ラジスはすこし弱虫で、たいていひとりぼっちですごしました。夏の間は中にわで、冬は、ベッドで、コンコンせきをしながら、絵を見たり、まんがを読んだり、古い新聞を読んだりしていました。ほかの子といっしょでは、かなわなかったからです。でも、気だてはよくで、そのかなしそうなようすが、なんとなく、気持ちのやさしい子に見せていました。

ラジスという名は、おじいさんがラジスラオという名まえだったからです。でも、ラジスは、ラオが氣にいらなくて、とうとう家の中だけでもラジスとよんでもらうようにしたのです。けれども、学校ではだめで、みんなはこのことでラジスをばかにしていました。ほんとうのところは、ラジスが本ずきで、学校のべんきょうもみんなよりよくできるのでくやしかったからなのです。

とうとうある日のこと、三がいにすんでいるおくさんが、ラジス进行をかわいそうに思っで、どうしておいしゃにつれていけないのかと、たずねました。おとうさんたちが、とてもお金がかかることだし、びんぼうなので、と答えました。すると、そのおくさんは、うちの子どもたちがかかっている、りっぱでしんせつなおいしゃさんにきていただくようにするから、とやくそくしました。

ラジスはぶるぶるっとしました。今まで、いちどもおいしさにみてもらったことはありません。たったいちど、はぐきをはれたので、はいしゃにはつれていかれたことがあります。そのときは、白いうわっぱりをきた先生が、スパナをつかって、はをひっこぬき、ラジスの目をちかちかっとさせました。

「また、はをぬくの？」

と、ラジスは聞いてみました。

でも、いよいよおいしやさんがきたら、たいしたことではありませんでした。むねやせなかにどうぐをあてて、中の音を聞いたり、うでをゴムでしばって、なしの形をしたゴムボールをふかふかおしてふくらませたり、したや、目の白いところをみたり、ああん、といわせたりしただけです。先生は、おなかをおさえたりもしました。それから、

「はい、おしまい。」

といって、外に出ておとうさんたちと話しました。

「すぐ、ぼうやのこと、しんばいしなければ……。すっかり弱っているし、やせてますね。」

「あんまり、食べないもんで……。」